

第4回男女別学教育シンポジウム

2015年5月23日（土）聖光学院中学校高等学校にて

司会者 辰巳順子先生（東京女子学園中学校高等学校校長補佐）

開会のご挨拶

中井俊巳（日本男女別学教育研究会代表）

皆様、こんにちは。ようこそ、おいでくださりありがとうございます。

本日は、遠くは北海道、福岡、鹿児島からもいらしてくださっています。本当にありがとうございます。

はじめに、男女別学教育シンポジウムについて簡単にご紹介します。

この会は、男女別学教育の良さを多くの方々にお伝えし、また発信していただくためのものです。

私の個人的な思いから始まり、多くの方がたのご協力によって運営されてきました。

私は現在、京都で作家・教育評論家などの仕事をしている者ですが、長崎で23年間、男子校に勤めていたときから、別学教育の良さをなかなか理解していただけないという思いがずっとありました。

そこで、別学教育の良さを少しでも知っていただきたいと願い、6年前、私は本を書こうと思いたちました。

といっても、女子校の具体的なことは、一から勉強しなければなりませんでした。

長崎から東京まで行き、一番はじめに取材させていただいたのが、鷗友学園です。

そのとき、様々なことを教えてくださったのが、この後、お話しくださる吉野先生です。

その後、アメリカなどにも取材に行ったのですが、振り返ってみて吉野先生に教えていただいたことが、その後、女子教育を理解していく上でのベースとなっていました。

男子教育については、聖光学院の工藤先生にお話しさせていただきます。

4年前に東日本大震災が起こった後、工藤先生がすぐに希望者の生徒80数名を引き連れてボランティアに行かれたことを、たまたまあることで知り、すごい学校だと敬意をもちました。聖光学院が素晴らしい人間教育を実践されているということを知り、この度お願いした次第です。

それから、後ほどパネルディスカッションでお話しくださる浅野学園の阿部先生と鎌倉女学院の錦先生は、工藤先生のご推薦による、ご存じのように神奈川県屈指の学校の校長先生方です。お二人とは今日、初めてお会いしましたが、素晴らしい先生方です。

もう一人、田園調布雙葉の滝口先生は何年前かに、私がマザー・テレサの本を出版したことがきっかけで知りました。この本を全国のいくらかの高校に寄贈させていただいたのですが、たいへん丁寧な御礼のお手紙をくださったのが滝口先生です。先生は、小・中・高校と女子校であり、そして母校にもどり、現在は校長職につかれています稀有の方なので、そのご

経験をお聴きできるのではないかとお願いしました。

また、パネルディスカッションでコーディネーターをしてくださる東京女子学園の實吉先生と、司会をしてくださっている辰巳先生、後でご挨拶いただく鷗友学園の清水先生は、第1回からずっとお世話になっております。

この会をやろうと言い出したのは、私ですが、当時の私は長崎に住んでおり、何の力もありません。

先生方のご協力がなければ、とてもシンポジウムはできませんでした。

また、この会のために、第一回から全国の多くの学校・団体・個人の方が協賛してくださっています。

この場を借りて、厚く御礼申し上げます。

そして、今日、会場に足を運んでくださった皆様、本当にありがとうございます。

皆様が、感じられたこと、お知りになったことを、ぜひ子どもたちの教育や将来のためにご活用くださり、またまわりの方々に、お伝えくださればと思います。

日本の男女別学教育をいっそう盛り上げていきましょう。 ご清聴、ありがとうございます。

基調講演「男子教育について」

工藤誠一先生（聖光学院中学校高等学校校長）

皆様、御紹介いただきました聖光学院の工藤でございます。本日は私どもの学校でこの男女別学セミナーを開催するということになりました。

私自身は、男子校で育って本校卒業でございます、そして戻ってということで全く女子を教えたということはありません。6年男子校、そして38年勤務トータル44年間、大学へ行っていた4年間だけ女子もみたかなというその程度でありまして、ですからなんとなく恐怖症というかそういった感じがあります。本当に恐怖症なんです。学校にいた方がいいんです。実は私、娘が3人、そして犬が3匹おりますがそれも全部雌なんです。ですから家に帰ると全て女性に囲まれております。

私共の学校というのは、実は女性の専任というのはゼロなんです。家庭科の講師の先生、英語の数人の先生あるいは選択芸術とかの部分で来ていただく先生で女性が少しおりますが、基本的に男性です。ですから完全な男社会。だからといって女性を蔑視しているわけではございません。超特殊な学校という形であります。たぶん男子校でもそういう学校は、今は少なくなっているのかなというふうに思っております。吉野先生と前にご一緒してこのようなお話をしたことがあります。女子校の先生方というのは、わりあい理論的に女子校の良さというのをアピールしていかなければな

らないという部分も、もしかしたらあるかもしれません。教育の在りようについては、男子中心に進められてきたということもありますし、また学校の数もわりあい中学から取るといった時には、圧倒的に女子校の方が多い。もともと私学というのは女子校の方が多いような気がします。それがじょじょに中学から受け入れるようになった。神奈川でも男子校という私学では、10校しかありません。それに比べて、共学もしくは女子校の数というのは多いですね。神奈川の場合私学発祥の地ということになっておりますが、それは女子校ということになります。そうした部分で、男子校というのがどういう部分なのかということをし少し私がお話して皆様に参考にしていただければと思っております。

自分自身は、今振り返っても男子校で良かったと思っておりますし、私の家内も小・中・高と女子校に行っておりましたので、自分の子供達も私学に行かせるということに対して抵抗がなく別学の教育を受けさせたというような部分もございます。私自身男子校の出身なので毎年同窓会をおこなっていますがテレビなどのような同窓会のトキメキなどは全くないですね。ですから聖光の同窓会に毎年行っても家内などはまったく安心して、帰ってくるのが何時であろうが許してもらえる。もっとも私達が出ていってもトキメキの出会いはないのかなということ、今や初老の老人の集まりになりつつある男子校の同窓会であります。

先ほど、中井先生から私共の学校の取り組みとして東日本大震災の時のボランティアの事をお話いただきました。まさにこのことなどは男子校にいたから出来るし、男子校に入ったからこそ子供達も出来たのかなというふうに思っております。

2011年3月東日本大震災が起きました。やはりその時に私は学校長として子供達にこの日本の状態を目の当たりに見せたいと、こういう思いを持ちました。もし、このボランティアというのを公立の学校がやろうとしたのならば、学校単独ではもちろん出来ません、教育委員会等の許可を得られなければならないし、それをもし申請したとしてもその返事がくるのは2ヶ月も3ヶ月も先であろうというふうに私は思います。私共の学校は私学ですから、私共の方でやろうというふうに決めて先生方の同意を得られればすぐに出来るわけであります。

あの震災の6月のあたまです。6月4日から8日と6月8日から12日、40名ずつ生徒を2グループに分けて岩手県の宮古にボランティアに行きました。その時高校1年生、高校2年生の生徒を対象にしたわけでありす。約200名ぐらいの応募者があり、その中からくじ引きで選んだりとか、あるいは同じクラスから集中して人数が出ますと授業が成り立ちませんので、そこは上手く割り振ってとりあえず40名ずつに隊になって行きました。当然、その前に保護者の方を集めての説明会をいたしました。最終的に80数名の中から2名のご家庭がやはりうちの家庭としては、このボランティアに危険とかそういったことを考えて参加することはできません、ということでお

断りになられたご家庭もありますが、結果としては、80 数名の生徒が出かけたわけであり、やはりこの体験というものには大きなものがありました。最初、持参してくるものの中にゴーグルであるとか長靴の底に鉄板の板敷きを敷くそうした物や、あるいはゴム手袋でも厚手の物とかを用意しなさいということがボランティアの必要道具としてあったわけであり、なるほど行って見て作業をしてみるとその物が必要だということがわかりました。作業は何をしたかという側溝でヘドロかきをしたわけであり、当然そのヘドロかきといっても津波の後のヘドロですからその中には、いろんな物が入っているわけであり、おそらく目に入ったら困るだろう、傷がついてそこから破傷風になるかも知れない、ですから長靴の底の鉄板の板敷きも必要だった、そして何よりも津波で流されたいろいろな家の跡地の所には、その亡くなられた方の鎮魂の為に花束が供えられていたり、あるいは側溝のヘドロかきをしているとそこからは、学級通信が出てきたり、子供のおもちゃが出てきたりということで実際の体験をもって被災地の状態を目の当たりにすることができました。そのことを戻ってきて全校に向けて発表会をしたということがあります。やはりこうしたことについては、男子校だから出来たことなのかなというふうに思いますし、女子校でも今は出来るかもしれませんが、しかし、やはり私は思い返すとより男子の集まりだからできたのではないかなというふうに今思っております。

現代の教育においては、たぶんゴーグルなどが誕生してからは知識を詰め込む、知識を知ることよりもその知を活かすために多くの経験をさせることが必要であるというふうに思っております。そうした時にやはり男女は別学であるということによってより多くの経験値を積むことができるのではないかなというふうに思っております。

私自身は、子供は全て女子でありますから子供達の修学旅行ですとか遠足ですとか、そういったものの予定表を見ると男子校と全く違う。たぶん共学だったら同じなのだろうかなと思うのでありますが、一番の違いというのは、バスなどの動かし方が全然違います。われわれがこの時間でもって 100 キロ遠くへ行ける所がどうしても途中の休憩時間の取り方等で全然移動する距離が違う。トイレの時間という、そういったものの取り方が違います。男子校の場合は、混んでいるから 5 分で済ませて、いざとなったら途中で脇道に駐めてで済んじゃうんですよ、そういう感じで 38 年ずっと教員をやってきた。ところがなかなか、女子の場合はそういう訳にはいかない、すごいのはお土産を買う時間をきちんと確保する、髪を洗って乾かす時間、男子校ではまず無いのです、私が自分は髪が無いから言うのではないのですが、女子は必ず髪を乾かす時間とお土産を買えないと反乱が起きて添乗員を潰しかねない位の状態です。私たちは全くそういうのは解りません、娘から聞いて、ああそうかと思えます。

もうひとつ言えるのは何かというと、中井先生の著作にも書かれているのですが、女子は生まれつき人の顔を見る、顔が好きなのですね、イケメンが好きなの。男

子は動く物が好きなのです、よくあるのですが、修学旅行だとかホームステイに行くと必ず保護者から言われることは「校長先生、行ってきたのですが子どもは全然写真を撮ってこない」、大体うちの生徒が行って撮ってくるのは滝だとか山だとか川だとかで人間は入ってないのです。ところが女子の場合や家のお母さん達もそうですが、まず人を入れて撮ります。ここのところは随分違うなという風に私はいつも思っておりまして、以来体育祭とか学園祭とか修学旅行などの時も写真を撮る人間を連れて行って、写真屋さんに行って貰って撮るといようなことをしなければならないことがあったりするわけでありまして。

そういった点で言っても男女ではそれぞれ関心を持つ分野が違うんだなということを目の当たりにするわけでありまして。男子の場合は割と人間関係もさっぱりしたようなもので、学年が変わってクラスが変わったりすると、その時々によって友人を作っていくことが出来るのでありますが、自分の娘達を見ていると、ずっと仲の良い子は同じで変わらないというところもあるという部分もあります。男子校の場合はそうした点でも友情の幅の繋がりというか、大体男というのは浮気性というか、そこら中のいろいろな人と付き合うという部分が強いのかも知れませんが、広がりという点では、そういう風になってくるとやはり男子校でもって六年間を通してネットワークを強くしていくということは非常に子どもたちの将来にとっても大きなプラスになっているのではないかなと私は思っています。

かつての時代カトリックの学校ですので女子と付き合うのは良くないと大いに言われたのです。昔は聖光学院の場合は石川町にはフェリス女学院、共立女子中高、横浜雙葉学園と三つ女子校があり、その他にも横浜女学院、サンモール、隣の石川町の駅は日本で最も女子中高生が乗り降りする駅です。大体私共の学校に入ってくる中学1年生は男子校に来て良かったかという、「うぜー女子が居なくなって良かった。」と言いますが、中3位になると、子どもたちが言うのは「校長先生、是非女子も入れて下さい。」と変わってくるのです。今回私共の学校は校舎を建て替えて綺麗にしたら、「いよいよ校長、共学化ですか。」と言われて、中学生位になると男女共学に憧れるようなものがあるのかも知れません。

ただ高校生、高校3年生になってくると、やっぱり男子校で良かったという形になります。それは体育祭にしろ、学園祭にしろ、そういったものが終わったときに校歌を高らかに歌い、肩を組み合う姿といのは、ひとつの男子校の特長で、女子校の場合に肩を組み合うとか、抱き合うとかで男子の場合は抱き合うということは無いです、肩を組むという形で、その絆というのは大きいのではないかと私は感じている訳であります。子どもたちが入ってきて一番小学校の時から中学校へ来て驚くのは、男の先生しかまず居ないことに驚くのです、どうしても公立の小学校は女性の先生の数が非常に多いですから、それがいきなりおじさんしか居ない、又同時に合っているかどうか

か分かりませんが意外とお母様方というのは女子の先生方に対して厳しい、男の先生は若くても男子の先生の方が男子教育には良いという思いが、そういう意味では女性同士だからうちの可愛い誰々ちゃんが、もう恋人と同じような感覚で捉えているお母様も居ますから、やはり同性の先生にいろいろと言われる位だったら母である自分が言えば良いというような思いがあるのかも知れないなと思ったりすることがあります。

そのようにして入ってきて、子どもたちは男子校というものの洗礼を受けるのであります。キャンプなどの行事では私共はカトリックの学校で修道会がやっているカナダの修道会ですからボーイスカウト的なキャンプをします。そうしたときには、レンジも無ければ水道も無い所に行って 2600m 位を連続して昇るようなキャンプをやっています。そういうときに男子校としての特長としての経験、体験になっていくのではないかと思います。今の時代、男女どちらが優秀であるか、そういった事では全く差は無いと私も思っています。その部分に関して言えば女子校のカリキュラムの中で高Ⅲで物理が無い学校がありました。そういう学校というのはたぶんもう一個もないと思う。その部分での差というのは全くなくなっている。能力もだいたい同じだし、試験をやると女子の方が教員採用試験でも上だったりもする。やはり精神的な発達というのは女子の方が早いので、うちの生徒たちは小学校の時むしろ虐げられていた子が多い。そういう子たちは「うざい女子がいなくてよかった」などという。そして相手の先生もだいたい男なので、子供達は教師と自分たちとの関係、距離感を男同士の関係、絆ができる。

女性の先生を入れるというのは非常に難しく、前に若い女の先生を入れたときは夢中になってしまう子が出てきた。保健室でクレゾール液をのんだり、カッターで自分を傷つけたり、先生の乗り降りする駅に待ち伏せしたり、今でいうストーカーのような行為をした。それからかつて私どもの吹奏楽部が、千葉先生に怒られるんですが、合同でブラスバンドの演奏会を行ったとき、うちの生徒が夢中になってしまって、その子は学年で一桁の成績だったがあっという間に後ろから一桁に落ちてしまった。うちの校長は「だからいったでしょう女性は魔女です」といっていました。確かにかつて女子大というのは色々なことがありまして、なぜかカトリックの学校同士で〇〇さんと□□さん。かなり前ですが、宮崎にフェリーでいってしまい、向こうの港で〇〇の先生と□□の先生が待ち構えて取り押さえるというそんな事件もありました。

でももう今は時代が変わって、先ほど吉野先生もおっしゃっていたが、鷗友学園は海陽学園と色々な行事をやっている。私どもの学校も川崎にある洗足学園さんと色々なことを一緒に取り組んでいる。どんなことをやっているかというと、毎年3月にやっているヤングアメリカンズというミュージカルを一緒にやったり、ワークショップをやってお互いに発表したり、それから NGLP といったかなこの夏ハーバードの学

生が8人来てセミナーハウスにてうちの生徒が20人、洗足さんが20人来て、2泊3日を過ごした。もちろんフロアを分けていたが、そうした時にむしろうちの生徒の方が「なんか怖い」といっていたので、大丈夫だフロアは別にしている。場合によっては柔道場に寝かせてやるからと言ってやった。今は女の子の方が活発になっている。でもやはりそうした形での取り組みというものが今の時代必要になってくる。男子校女子校ということで日々の日常活動は別にした方が、それぞれ男性がもっている良さ、女性が持っている良さが伸びていくだろうし、男性だけだから女性だけだから経験できることというのもあると思う。顕著に言えることは公立の中学校と試合をやることがあると、私どもの学校はどちらかということそんなにスポーツが強い学校ではないのだが、中学校のレベルになると今や強くなっている。というのは中学校の規模というのは中区ですと一学年にして120人前後。そしてこれが男女である。

うちの場合は一学年225人男子だけです。やはり戦力の幅が違うわけです。ですから今までは聖光学園といえば中区の大会にできればすぐ負けていた。どちらかといえば強くない。今は逆に軟式野球なんかをやれば中区の学校の中では優勝や準優勝して当たり前みたいになった。そうすると子供達も自分たちはできるんだがんばろう、となる。そういう意味では、うちは月曜から試験だが今、サッカー部は練習をしている。試験の前なので普通はやらないはずだが、大会にむけてということでやっている。そういうことはつながっていて、そういうことが男子校としての強さになっていると思う。そうするとクラブ活動の位置づけというのは子供達の方もある程度強くて、という部分がプラスになるので、やる気にもなるので、そのようなスポーツの励みというものができてきていると思う。

どうしても子供達というものがどのような環境におかれるかによってその子供が伸びる伸びないというのがある。そうしたときに例えば、洗足と NGLP を一緒にやると言ったときに、女の子はぱーっと喋るから嫌なんだという子もいたりする。たぶん英会話のレッスンなんかにしても私どもの学校はスカイプを使ってフィリピンと英会話をしたりすると、男子だけでもって1対20でやったり1対10でやるよりもずっと話す機会が多くなったりする。たぶんこれは男の子と女の子がいた場合、そういう場合でも圧倒されすぎてしまうのではないか。でもある一定の段階になったら男子と女子と一緒にやらなくてはいけないが、それは大学生、社会人になってからでよいのではないか。中等教育の難しさ、良さというのはやりたくない人間に無理矢理やらせるというか、一つの型にはめるといのが中等教育の一つの基本であると考えるので、そうしたときにも男子だけであるということがプラスになるのではないか。どうしても異性を意識しすぎるといことが、中学生高校生くらいまではあるので、その部分を日常生活の中からある程度解放してあげることによって子供達の伸びがでてくるのではないか。

私自身は 38 年間男子校の教員をしているので、もう女子教育は絶対にできない。もう 100 パーセント無理である。やはりその面談にしても、いろんな話にしてもたぶん絶対に無理だし、なんか言ったらもう泣かれたら困ってしまうなという恐ろしさでいっぱいだ。自分の娘でさえ教育できていないので無理だろう。何か言うとわーっと言い返されてうんうんうんとなって終わって、次に私が言うと泣き出されて終わりですから。これが女子校だと生徒との関係はどうなるのかなということはいずれどこかで試してみたいと思っている。

逆に言うと私学は男子校女子校を選ぶことができるので私学の存在価値もあるのではないか。共学校を選ぶのも一つの方法ですし、男子校も選べる女子校も選べるそしてその部分に関して言えばその子供の個性というか性格、成長段階に合わせて学校を選ぶ。その教育の種類を選ぶ権利が保障されているのが民主国家であると思う。そのことは世界人権宣言にも高らかに謳われている。親は子供の教育の種類を選ぶ権利を有する。それは公立であるか私学であるか。そして男子校であるか女子校であるか共学であるか。そうしたものが保障されてこそ真の民主主義である。これは共学だから民主主義なのではない、教育の種類を選ぶ権利が保障されているのが民主国家である。そして同時に教育というのがどのように、公私が変わっても子供達、次の時代を担う生徒達にぬくもりを伝え、人間として生きていくことの素晴らしさ、“生きている”から“生きていく”に変えていくそれが我々教育現場にいるものの使命であると思っている。我々私学の、男子校、女子校、共学校この種類があることに感謝をし、そして今ある舞台をもって目の前にいる生徒と向き合っていく、それを皆様とともに分かち合っていくということが明日の日本の子供達、そして世界に貢献する子供達を作り出していく事になると思う。